

# 児童養護施設の入居児童へのセミナーに関するプログラム評価

— NPO法人ブリッジ・フォー・スマイルにおけるロールモデルとしての  
社会人ボランティア —

齋藤 嘉孝 Yoshitaka SAITO

## Title:

**A program evaluation of a seminar for children who live in children's care homes: Young adult volunteers as role models in a non-profit organization, Bridge for Smile**

## Abstract:

It is sometimes discussed that children living in children's care homes may only have lower social skills than other children, which may cause some problems and difficulties in their lives after they leave children's care homes. There is a non-profit organization (Bridge for Smile) in Tokyo that aims to improve the children's social skills by providing a seminar conducted mainly by young adult volunteers. This study examines effects of the seminar on children's social skills. One of the main findings was that having young adult volunteers as role models makes a difference. This might imply that participation of young adult volunteers would be more desirable for children's preparation process for leaving the care homes.

## キーワード:

児童養護施設、自立支援、プログラム評価、ブリッジ・フォー・スマイル、社会人ロールモデル

## I 序

本稿は、児童養護施設の入居児童に対する自立支援事業に関して、プログラム評価を行う。対象として、あるNPO（非営利組織）で行われている事業に注目し、数量的手法によって評価を行う。本稿で対象とするNPO法人「ブリッジ・フォー・スマイル」<sup>1)</sup>では、児童養護施設に居住する高校生に向けた事業を、社会人ボランティアを集結することで開催している。当事例を検討することで、より広義に、一般的に日本の児童福祉政策の抱える課題や、それに関する一つの対策を講じ、社会人ボランティアの役割という点から、政策的示唆を見出したい。

## II 問題の背景

## 1. 退所者の抱えうる問題

わが国の児童福祉に関連する施設の一つとして児童養護施設がある。親が不在の児童や、入院などの事情により親が子育てできない状況にある児童、あるいは親による虐待から避難することが必要な児童など、さまざまな背景を持った児童が、児童養護施設に居住している（平湯 1997: 182; 長谷川 2005: 80）。

児童養護施設には乳幼児から高校生まだが居住しているが、高校を卒業すると同時に、退所せねばならない。退所すると、多くは一人暮らしを始め（春日・早川 2006: 24）、社会人としての「巣立ち」を強いられる。児童養護施設に入居していた高校生が大学に進学するのは、全国高校生平均の 44.8% よりずっと低く、8.5% ほどという統計があり（長谷川 2007: 188）、つまり大多数の退所者が文字通り「社会人」になる。

社会人になったとしても、施設退所児童の定着した職業への就業は、決して簡単ではないことが指摘されている（長谷川 2007: 190-193）。また、生活面をみても、自らが家庭を有した場合の虐待の連鎖の可能性などもある（関連: Haapasalo & Aaltonen 1999; 池田 1987: 101-102）。この他にも、社会人になり施設を退所した後で退所者たちが抱えうる問題は、決して小さくない（廣瀬 2007）。

## 2. 「社会人」としてのスキル

前節で指摘した退所者に生じうる問題の所在の一端を、本節では「社会人」としてのスキルという点から論じたい。これが退所者に欠けている、あるいはもっと習得されてしかるべきと施設現場や法制度などで論じられている（庄司他 1997; 竹中 1998; 萬谷・西崎 2000; 神戸 2007）。

児童養護施設では一般に、施設長・保育士・児童指導司などが職員として働いており、児童たちへの日常的なケアや生活的・道徳的指導、あるいは心理的なサポートなどを行う。入所期間中、親に代わって、児童たちはこうした大人たちと日常的に接している。

しかし、入居児童にとっての大人とは施設職員であり、それは「常に施設にいる」存在であり、「自分たちの世話を本業とする」存在である。つまり、一般的な「社会人」と接する機会が、家庭で暮らす児童に比べて少ない。少なくとも家庭で暮らす児童は、親という存在を通して社会人としての生活を垣間見ることができる。

こうした経験は、生活のこまごましたところで生じると考えられる。例えば、多くの社会人には、月曜から金曜まで、朝出勤して夕方（夜）に帰宅するという生活のサイクルがあるが、このことさえ入居児童にとっては実感としてわかりにくい。あるいは、就業する母親が帰宅後に家事を行う手際なども、目の当たりにする機会に欠いている<sup>2)</sup>。それが社会人になってからの離職率や家庭における言動と、無関係とはいえないだろう（もちろん非を求めるべきは、児童当人たちでも、施設職員でもない。職員にとって、毎日のケアや指導などを全うするだけでも容易なことではない（庄司他 1997）。

ここでロールモデル（role model）という概念に言及したい。例えば、親や身近な成人の言動や生活の様子などを、ふだんから近くで見聞することで、自分でもそれを身につけてゆく。その点で、児童養護施設の入居児童は、いわば「社会人ロールモデル」を持ちにく

いまま、退所の時期を迎え、社会人となることを強いられかねない。これは後の人生にとって、影響が少なくないだろう。

米国の研究では、ホワイトカラーの社会人に接する機会に欠けた地域の児童たちの発達のアウトカムは、比較的低位になりがちなのが示されている。Wilson (1987) はそれを「集中効果 (concentration effect)」の議論の中で、黒人スラムにおける貧困の連鎖を、地域社会における成人たちの生活と関係させて説明した。ホワイトカラー成人が近隣にいない状況では、子どもたちは貧困の中で生活する成人しか目にせず、定職に就くことや定時に働くこと、貯蓄することなどの意味を体感できない。すると、貧困から抜け出す成人像が、自分の中にロールモデルとして根づかないという。

もちろん退所者の抱える問題の所在が、全て「社会人」としてのスキルの低位性に求められると論じているのではない。より広義の社会構造や就業構造などにも求められるだろうし、それらの可能性を否定しない。ただし、本稿のスタンスとして、退所者たち自身で解決（あるいは問題の軽減）に向かうことのできる側面として、スキルアップが考慮されてもよいのではないか、という主張がある。

### III 事例として—B 4 Sによる「巣立ち」セミナー

児童養護施設を退所するにあたり、児童たちに社会人としての資質が求められるものの、彼らにそれを育む機会が欠けてしまうのは、上に指摘した。その隙間を埋める活動を行なうNPOとして、「ブリッジ・フォー・スマイル (以下、B 4 S)」がある。このB 4 Sによって「巣立ちプロジェクト」なる施設在住の高校生に向けた「巣立ち」セミナーが、2005年度より行われている。主眼は、社会人としてのスキルや心構えを、レクチャー、ワークショップ、ディスカッションなどを通して習得することにある。

対象は、児童養護施設に入居する高校生である (参加者は3年生が比較的多め)<sup>3)</sup>。毎年、秋から冬にかけて、土曜日や日曜日を使い、数回シリーズでセミナーを開催している。開催地は東京近郊の数ヶ所であり、2007年度の例でいうと、東京・神奈川・埼玉・千葉の4ヶ所だった。児童養護施設にB 4 Sが直接宣伝を行い、各施設から希望者が参加するのが通常であり、あくまで何か強制力や義務の働く余地はない。

セミナーの大きな特徴の一つは、社会人ボランティアによる運営・執行である。セミナー内容の企画から、当日の会場準備や次第まで、ボランティアが実行部隊となる。ボランティアは都心の企業に勤務する社員が中心で、おおむね20~30代の男女である<sup>4)</sup>。

セミナーの最中には、1人の高校生に対してボランティアが通常1名以上担当し、サポートを行なうのを基本としている。ディスカッションやクイズ、プレゼンテーションなどにおいて、高校生は社会人ボランティアと密に接し、課題をこなしたり、何かを作りあげたりしてゆく。

セミナーの内容は、「社会人になるための基本的な資質」を習得することを主眼としている。2007年度の例でいえば、「7つの軸」を通して、セミナーのコンテンツがオリジナルに組まれた。7つの軸とは、①メンタル、②コミュニケーション、③健康生活、④金銭管理、

⑤自己防衛、⑥お役立ちスキル、⑦仕事、であった（詳細は後述）。

また、希望者には個別サポートも提供される。毎回のセミナー終了後、その日の内容を振り返るのを目的とし、1人の高校生に対し、1人の社会人ボランティア（毎回同人物）が担当する（「ココロサポート」と呼ばれる）。

こうして、施設職員や福祉・保育等専門職でもなく、あるいは学校教員でもない社会人ボランティアたちが、自らの企業での体験や、ふだんの生活などを話題にし、「ふつうの大人」としてのサポートを行なうことに、当セミナーの特徴の1つがある<sup>5)</sup>。

#### IV 方法

本稿では、以下の手法を用いて、当セミナーのプログラム評価を数量的に行う。児童養護に関する数量的評価という点、例えば米国の Chamberlain & Moore(1998) などがある。そこでは、過去に問題行動をおこした児童を、里親あるいは養護施設に住ませた場合、後の犯罪歴などに違いが出てくることを実証している。

日本における事業評価は、児童養護の分野に限らず、発展に立ち遅れているのが現状である（上山 2002; 斎藤 2008）。児童養護施設における自立支援に関する取組みも、たしかに存在するが（例：北島 1999）、評価は特別なされないか、なされても記述的（あるいは主観的）な評価、もしくは参加者の感想を事後にたずねるのみが大方である。

つまり、養護施設の入居児童に対するセミナーの効果については、科学的プログラム評価研究でいうような（Rossi, et al. 2004）研究の蓄積はほとんどない。本来事業を行なう場合、事業の開催自体に意味を見出すだけでもなければ、参加者にとって効果があったろうと主観的に判断するだけでも十分ではない。この点で本稿は独自のものといえる。

本研究において、セミナーによる参加者への効果を測定するにあたり、セミナー前後に同一の質問紙調査を行った。用いた質問紙の具体的項目は、「7つの軸」に基づいた表1の通りである。それぞれの軸につき5項目が存在し（計 35 項目）、この各項目が4件法で質問された。以下、これを総合した得点を「巣立ち度指数」と呼ぶ。

表1 「巣立ち度指数」の具体的項目

「7つの軸」	具体的項目
①メンタル	ストレス解消法、自分の長所把握、目標認知、感情コントロール、孤独感コントロール
②コミュニケーション	挨拶、相談相手、未知事項の質問、他者の長所認知、親しくない人への対応
③健康生活	起床、料理、栄養意識、定期的運動と睡眠、衣服管理
④金銭管理	金利への知識、計画的貯蓄、生活費意識、節約法、収支簿の重要性
⑤自己防衛	社会保険の知識、悪徳商法の見極め、疾病時対応、保証人対応、避妊の実践

⑥お役立ちスキル	情報収集力、イベント企画術、冠婚葬祭マナー、返品返金、引越し手続き
⑦仕事	忍耐力、報告等、連絡の実践、継続力、協調性

この「巣立ち度指数」の範囲は、一人につき 35～140 点だった（得点幅 105 点）。本稿では、事後の得点を事前の得点で引き、その差異を当セミナーによる効果と定義する。

セミナー参加者は基本的に全員が会場にて当質問紙に回答した（集合法による）<sup>6)</sup>。計 36 人が回答した。ただし、うち事前調査に回答しなかった例が 1 例あったため、前後療法に回答した 35 人を有効分析対象とした<sup>7)</sup>。

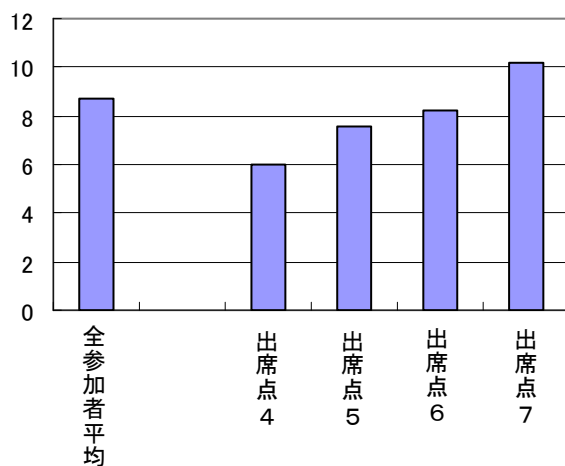
## V 分析

### 1. 参加者へのセミナーによる効果—「巣立ち度指数」の基本結果

当調査によって得られた数量データに関する記述統計は、次の通りである。まず、全 35 項目を総計した「巣立ち度指数」は、全参加者平均で 8.8 点増だった（図 1「全参加者平均」）。105 点の得点幅の指数において、事前と事後で約 9% の上昇幅を示した。

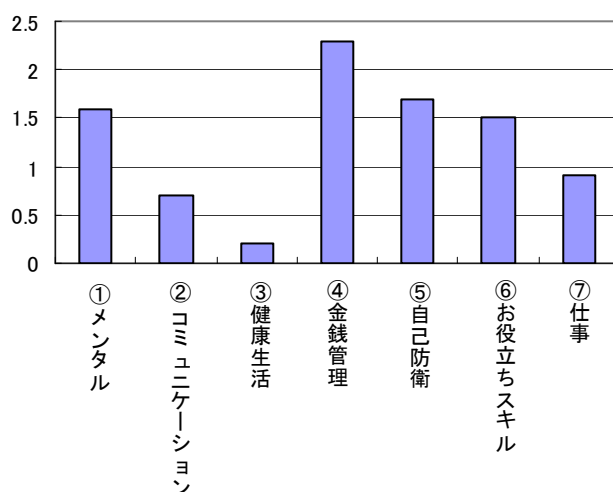
なお、プログラムの効果は、そこに出席しただけでなく、出席回数とも関係することがこれまでのプログラム評価研究でも示されている（Farkas 1998）。それは当研究でも同様の論理が使える。つまり「巣立ちセミナー」の意義があればあるほど、出席回数の多寡が上昇幅に関係すると予想される。そこで、出席点をもとにした「巣立ち度指数」の分析も行った。

結果は図 1「出席点 4～7」のとおりである。出席率を 7 件法で測定し、7 点が最高点で全出席とした（4 ポイント以下は 1 つにまとめた）。「巣立ち度指数」は、もっとも低い「出席点 4」で 6.0 点増だったのに、全部出席を意味する「出席点 7」では 10.2 点増だった。



次に、学年が上がるにつれて、退所は実感できる問題になることが予想された。そこで、学年別に効果をみた。結果は、高校3年生でもっとも上昇幅が大きく、11.0点増だった。もっとも上昇幅が小さかったのは高校2年生で3.6点増だった（高校1年生は8.4点増、図は非表示）。

また図2に示したように、「7つの軸」別に効果を見たところ、①「金銭管理」がもっとも大きい上昇を示した。ついで「自己防衛」「メンタル」「お役立ちスキル」だった。上昇幅の小さかったのは「健康生活」だった。具体的な上昇幅は、順に①メンタル1.6点増、②コミュニケーション0.7点増、③健康生活0.2点増、④金銭管理2.3点増、⑤自己防衛1.7点増、⑥お役立ちスキル1.5点増、⑦仕事0.9点増だった。



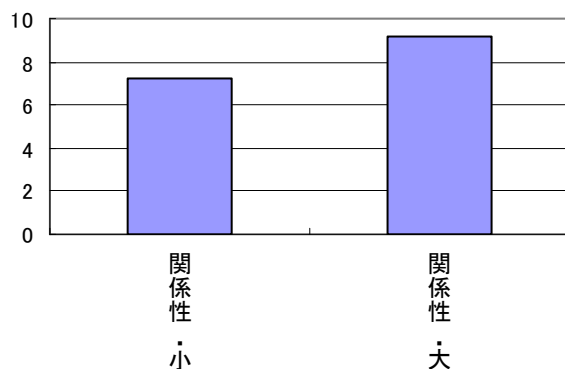
## 2. 社会人ボランティアによる効果

当セミナーの大きな特徴の一つは、社会人ボランティアによるサポートであることは先述したが、こうした社会人との関係性の程度が、いかに事前から事後の変化に関係したか、本節で分析する。

まず本調査の質問紙では、参加者における社会人ボランティアとの交流の満足度を、5件法で測定した。しかし、この満足度と「巣立ち指数」の変化には、ほとんど関連がなかった（結果は非表示）。

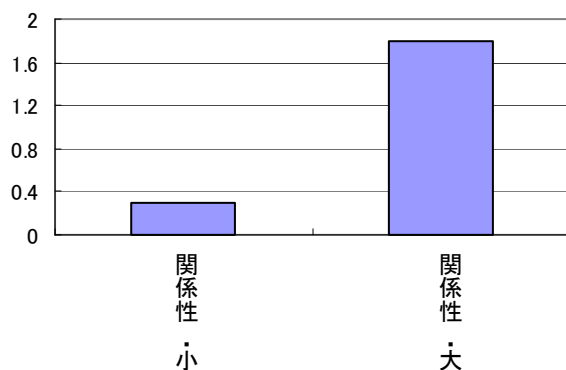
次に、参加者がいかにボランティアと親しくなったかの指標として、好印象をもったボランティアを具体的に3名まで、質問紙で聞いた。3名全て挙げたのは20人で、1人も挙げなかった参加者が6人いた。そこで、当項目に1人でも名前を挙げたか否かを2項変数とし、「関係性の大小」の別に、事前から事後の「巣立ち度指数」変化の差異をしらべた。結果は図3で示した通り、誰も挙げなかった群（関係性・小）よりも、1人でも挙げた群（関係性・大）のほうが、高い伸び幅を示していた（7.2点増 vs 9.2点増）。

図3 セミナー参加による「巣立ち度指数」上昇幅—ボランティアとの関係性別



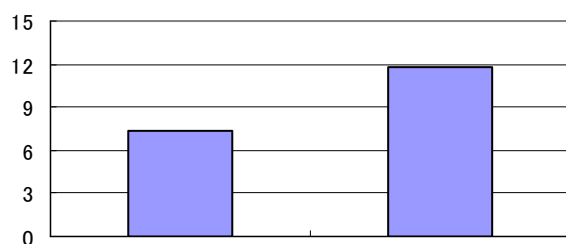
とりわけ、「7つの軸」においてこれを分析すると、なかでももっとも大きな差異で上昇幅を示したのは「メンタル」だった（関係性・小 0.3 点増 vs 関係性大 1.8 点増）。その結果を図4で報告した。

図4 セミナー参加による「メンタル」上昇幅—ボランティアとの関係性別



もう一つ、社会人との関係性という点で、重要な変数がある。先述したように、セミナーによる集団的機會だけでなく、補足的役割をもった個別サポート（ココロサポート）も提供されている。この個別サポートを使用したか否かで、「巣立ち度指数」を分析した。結果は図5に示す通り、個別サポートを使用し、社会人とより多く、個別に関わりを持った参加者のほうが、上昇幅が大きかった（なし 7.4 点増 vs あり 11.8 点増<sup>8)</sup>）。

図5 セミナー参加による「巣立ち度指数」上昇幅—個別サポート有無



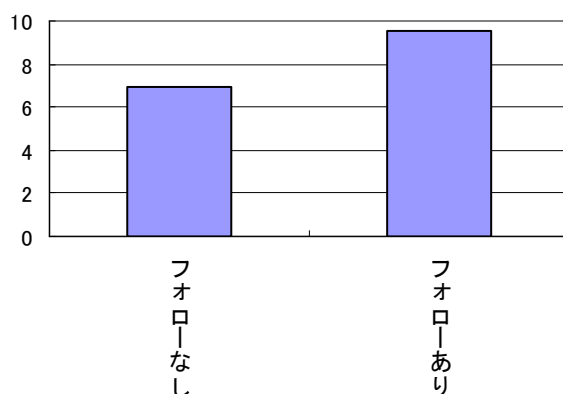
先の図4での分析同様、「7つの軸」別に分析したところ、同じように「メンタル」がもっとも大きな幅で上昇した（結果は非表示）。

### 3. 施設職員のフォローによる効果

本分析では、セミナーの当日、施設に帰った高校生たちを施設職員がなんらかのフォローを行ったかについても、効果に関係するのではないかと考えた。施設職員への質問紙調査として、セミナー後に協力を依頼し、担当の入所児童の様子や、当日のセミナーのふり返り状況などについてたずねた。とりわけ、施設職員が「巣立ち」セミナーについて、①様子を聞いたか、②高校生に説明させたか、③資料をいっしょに見たか、をたずねたが、このうち1つでも該当するものがあるか否かで2項変数を作成した。

結果は図6に示したとおり、施設でのフォローの有無によって、効果が異なることが示された（なし 6.9点増 vs あり 9.5点増）。会場での社会人ボランティアだけでなく、施設における大人たちのフォローも意義深いことが見てとれる。

図6 セミナー参加による「巣立ち度指数」上昇幅—施設職員フォロー有無



## VI 考察

### 1. 「巣立ち」セミナーの効果

以上の分析で示されたように、「巣立ち」セミナーは一定の効果を参加者に与えていると考えられる。それは従来、施設入居の高校生に必要と思われてきたスキルであり（庄司他 1997; 竹中 1998; 萬谷・西崎 2000; 神戸 2007）、実際、社会人になってからの諸問題との関連性が懸念されてきたものでもある。しかし、当事例は、数回のセミナーによりそうしたスキルが一定の向上をなしうる可能性を示唆していた。つまり、「施設入所者だから低い」あるいは「打つ手のない」類いの資質ではないと考えられる。伸びる余地が多分にある、向上可能なスキルと捉えることができよう。今後も当NPO団体がこのセミナー行う意義として、一つのエビデンスにもなりうる。

ただし、上の分析でみたように、効果の多寡に影響しうる介在要因があることが考えられる。なかでも重視したいのが、社会人によるサポートや施設職員によるフォローである。



これがあるのとなないのでは、効果に違いがある可能性がある。

社会人については、先述したロールモデルとしての重要性以外にも、ピアサポート (peer support) という文脈でも説明できる。つまり、講師や専門家によるサポートだけでなく、より当事者に近い立場からのサポートである。当セミナーにおいては、自分たちの将来像としての社会人サポートが、この機能をはたしていたと考えられる。いっしょになって課題に取り組み、ともに考え、意見を発する。そうした存在が、参加者にとって、学びの効果を促進していたのかもしれない。こうした、より当事者に近い者からのサポートの有効性は、小学生の学習プログラムにおける、上級生によるサポートの効果としても、実証的に示されている (Farkas 1998)。

さらにいえば、社会人の中に施設退所者が混じり、高校生たちのサポートをおこなっていたことは、より効果を促進した可能性がある。高校生にしてみれば、もとは同じように受講生として参加していた人たちが今では社会人となり、サポートする側にまわっているという事実は、計り知れない効果をもつのではないだろうか。

また、こうした社会人の役割が、とくに「メンタル」という側面の効果に大きな意味をもつことは興味深い。それは上の図3および図5の中で、結果として見られた。社会人になるにあたってのストレスとの付き合い方や気持ちの管理などが、ただセミナーを受けるだけより、近くの実例 (社会人) をみたり、生の体験を聞いたりすることで、より実感できるのではないだろうか。

そしてもちろん、社会人ボランティアだけでなく、施設職員のサポートは大きな意味がある。教育社会学等の知見によれば、学校におけるパフォーマンス (例: 成績、言動) は、親など家庭内でのサポートがあると有意に違うことが報告されている (例: Ogbu & Simons 1998)。例えば、帰宅して別の (しかも親という) 大人から、学校で教わったのを否定・軽視されるような状況では、学びの効果が下がりがねない。同様の論理で、施設職員が「巣立ち」セミナーについてサポートがあることが学びの促進につながるのは、無理な理屈ではない。

つまりは、単に学ぶだけでなく周囲の人間からのサポートがあると、その効果はより大きくなるのが、本稿でも実証された。

ただし、「社会人との交流満足度」については満足していようとまいと、学びの効果に大きな違いは出なかった。この解釈として、一つには、一様に「社会人との交流」とくくると、高校生にとって全ての社会人を含めたかたちになっており、良い関係性と良くない関係性の両方を感じていた場合、相殺された可能性がある。検討が必要な点である。

## 2. 「巣立ち」セミナーの課題

数量的に効果を示した「巣立ち」セミナーだが、今後克服すべき課題もまた検討する必要がある。以下、2点を指摘したい。

### (1) 得点の下降したケース

第一に、全ての参加者の得点が上がったわけではなく、事前から事後で得点が下がった

ケースも数例あった。これはセミナー参加することで、「巣立ち度指数」が下がったといえる。理由は一様でないだろうが、一つには、参加してかえって自信をなくしたことが想像される。多くの事項を知ることで、「自分はまだ未熟だ」と感じてしまうことも皆無ではないだろう。

しかし、ここで重視すべきは、得点の下がったタイプの洗い出しである。いくつか他の変数に注目して追加分析を行ったので、紹介したい（結果は非表示）。

まず個別サポート（ココサポート）を利用した高校生たちの中には、得点の下がったケースは一例もなかった。これは、やはり社会人との関係性による効果の程を示す、新たな証拠ともいえる。

次に、学年別に見たが、2年生において得点の下がった割合が比較的高かった。3年生は施設退所が目前の課題でもあり、モチベーションや取組みの真剣さなどが、下級生より高度なことは十分に予想できる。また、1年生は（セミナー開始が2学期早々なこともあり）緊張感をもって、先輩たちと受講している姿が思い浮かぶ。そう考えると、2年生は比較的「中だるみ」の時期にセミナー参加をしているのかもしれない、得点の下がる可能性も理解しうる。

以上を概観するに、セミナー内容に反省の目を向けること以外に、社会人によるサポートや、学年別の効果なども考慮した、別の角度からの対策も可能であろう。

## (2)長期的効果

もう一つ、上の分析を通じてでは見えないものだが、セミナーの効果がどれほど長期的に継続しうるか、考慮すべきだろう。プログラム実践の常ではあるが、短期的効果をあげたことが一時的な効用だけに終わっていないかは、検討の余地がある。

この点に関して、本来は年月を経た上での追跡調査が有効である。米国のプログラムでは、数年後などにプログラム参加者と非参加者を追跡調査によって数量的に比較し、その長期的効果を測る取組みがなされている（例：Chamberlain & Moore 1998）。この点、今後の当NPOの事業の一つとして、退所者への追跡調査が計画されており、克服できない課題ではないと考えられる。

また、数量的なエビデンスは本稿で提示できないまでも、筆者の聞く限りの情報から、ナラティブなエビデンスは存在する。例えば、施設退所者A（男性）は過去におけるセミナー参加者でもあったが、「このセミナーに参加したからこそ、社会人一年目を乗り越えられた」との言説を行っている。

さらに、当NPOの既存事業として、「アトモプロジェクト」がある。これは、施設退所者を対象としたイベント中心の事業である。やはり社会人ボランティアが基本的に企画・運営を行う。具体的には、「巣立ち」セミナーに参加し、すでに社会に出た退所者たちが、休日を利用して、社会人や同じ境遇の退所者たちと交流する機会を提供している。

つまり当NPOでは、別の事業の中で退所者をサポートする体制も配慮している。この「アトモプロジェクト」での交流の際に、退所者とのかわりの中で「メンタル」「金銭管理」などの相談を行うことも可能な体制をとっている。セミナーの長期的効果そのもので

はないが、仮に「巣立ち」セミナーの効果に期間的限界があると立証されたとしても、別の形態でのサポートに着手していることは評価に値しよう<sup>9)</sup>。

## VII 政策的示唆

上の分析および考察を通して、本プログラム評価から見えてくるものを提示したい。本事例における知見は、児童養護施設の外部で行われるサポートに効果があることを示唆していた。つまり、施設職員だけでなく専門職でもない現役の一般社会人が、入居児童たちの成長へのサポート役として機能しうることを示していた。言い換えれば、「児童養護分野における一般社会人のエンパワメント」の可能性を秘めているといえよう。

児童福祉法の改正（2004年）により、児童養護施設は退所者に対するアフターケアが義務化された（第41条）。しかし法とは裏腹に、徹底された実践になりえていない現状がある。

問題の大きな要素として、児童養護施設には、アフターケアを専属的に担当する職員が通常いないことが挙げられる（庄司他 1997；春日・早川 2006）。さらに、アフターケアを具体的にどう指導すればよいか、不明確な要素も多い<sup>10)</sup>。つまり、入所児童に指導できるような組織的対応があまり徹底されていない。それに、どうしても目前の入所児童へのサポートやケアが優先され、対処者のことは優先順位が低位にならざるをえない現状がある。

しかし、本稿の知見との関係で人材の問題をいえば、施設入居児童が社会人と触れ合う機会をつくることは、すでに1998年の「児童福祉施設最低基準等の一部を改正する省令の施行に係る留意点について」でうたわれている。つまり、もはや理念としては、施設職員だけでなく、社会人にも入居児童のサポートを任せることが明記されている。これを実践に移すことが次なる政策的課題のはずである。

この意味で、NPOの持つ人的資源の活用は、アフターケアの実践にはきわめて適していると考えられる。施設職員や専門職を増やすことや施設での取り組みを強化すること（庄司他 1997；神戸 2007）以外にも、人材の問題を軽減しうる可能性があると言言したい。それはいわばアウトソーシングの活用である。実際「脱施設化」という言葉にもあるように、施設が外に目を向けることが促進される流れは、すでに世潮として存在する（関連：伊藤 2007）。

ただし、本事例でみるように、セミナーにおける社会人ボランティアの登用に際して注意すべきことがある。本稿の知見が示唆するのは、施設入居児童に対して、社会人が単発のレクチャーを与えたり、社会人と単に接する機会をつくったりすることに意味があるということではない。「巣立ち」セミナーでは、単発でなく、複数回の機会を設けることにより、高校生は社会人たちと知り合いになってゆく。回を重ねることで顔をおぼえ、名前を呼べるようになり、互いを知ってゆく。そうすることで、「ふつうの」社会人と、一定期間を経た関係性を築くことができ、「こういう大人たちが実際に世間で働いているんだ」と何度も実感することができる。

こうした一連のプロセスが、一般社会人のロールモデルを形成するのに必要な要素では

ないだろうか。政策的実践において、単発のセミナーや単発の交流機会などがよくある形態だが（斎藤 2008）、そうした単発の実践で終わらせないことを望みたい。

なお、社会人ボランティアの活用には、ほかの利点もある。プログラム評価では、その効果だけでなく、財政的な側面も問題になるが、ボランティアであることを前提とすれば、当然費用は抑えられる。

もう一つの重要な利点は、社会人たち自身への優れた啓蒙の機会をつくれることである。たとえば当NPOの場合、児童養護施設のこと、あるいは広く児童福祉のことなどを研修で学ぶ機会が設けられている。一般の社会人は、児童養護施設やその職員、あるいは入所児童たちの背景や生活など、ほとんど知らないのが現実であろう。しかし、虐待の現状だけでなく、例えば親になること、児童の発達、子育てなどは、多くの成人が経験することでもあり、必要事項でもある。社会人の登用は一般啓蒙の意味もあることを添えておきたい。

## VIII 結び

児童養護施設の入居児童にとって、施設職員からのサポートはもちろん大きな意義がある。だが同時に、社会人ボランティアの秘める可能性も見のがせない。NPOブリッジ・フォー・スマイルの「巣立ち」セミナーは、参加高校生にとって、概して正の効果を示すことがわかった。その効果の促進要因が、社会人ボランティアとの関係性にある可能性も指摘された<sup>11)</sup>。本稿のこうした知見は、実際、行政から民間に事業移行が進むわが国の政策的風潮に沿うものでもある。行政と施設以外の第三者が児童養護施設の入居者にもっと関わるべきとする現在の政策理念的方向性は（詳細は前述）、本稿の数量ベースの知見からみても支持されうることである。一般社会人のボランティア意識やモチベーション向上が、こうした政策的進展とともにもっと喚起される可能性もある。

### 【注】

- 1) 在東京都千代田区。代表・林恵子。 <http://www.b4s.jp>
- 2) 施設職員などへのインタビューによる。
- 3) 2008年度は3年生のみとし、1、2年生には別の形態での研修を提供する予定。
- 4) なかには児童養護施設の職員も、アドバイザー的な役割も含めて協力している。施設退所者も参加している。
- 5) もちろん児童養護施設などに関する知識習得といった研修は、ボランティアが事前に受けるものの、それはあくまで専門職になるためのものではない。
- 6) 例外的に、欠席者は後にFAXで回答した。
- 7) なお、分析にあたっては例数の少なさゆえ、統計的有意差検定は困難であった。
- 8) 事前における「巣立ち度指数」得点がこの結果に関わりうるかを検討するため、「コッコサポート」の利用有無の別に、事前の得点をしらべた（例えば、非利用者はその必要性を感じず、もともと高い得点だったので、伸びる余地がなかった、など）。たしかにその利用者と非利用者には違いがあり、非利用者は低めだった。しかし、それでも94.5点と

いう得点であり（利用者は 84.3 点）、伸びる余地がなかったと考えるに十分なだけの高得点とはいえない。

- 9) 実をいえば、もう一つ、「7つの軸」別にみた際の「健康管理」の伸びが小さいことも課題とみなしてよい。セミナーのコンテンツを変えるなど、検討の余地がある。セミナー自体は料理に関するコンテンツが中心だったが、尺度との整合性とすれば、もっと健康一般も取り入れる必要があったかもしれない。
- 10) しかし、東京都では、「リービング・ケア委員会」という施設職員の一団が、東京都社会福祉協議会の委託による自立支援の促進活動を行っている。
- 11) 本稿ではあえてレクチャーのコンテンツに深く触れなかった。しかし、もちろんそれらも効果の多寡を決める重要な要因と想像される。機会を改めて検討する必要がある。

#### 【引用文献】

- Chamberlain, P., & K. Moore, 1998. "Models of community treatment for serious juvenile offenders," in J. Crane (ed.), *Social Programs that Work*, Russell Sage Foundation: 258-276
- Farkas, G., 1998. "Reading One-to-One: An intensive program serving a great many students while still achieving large effects," in J. Crane (ed.), *Social Programs that Work*, Russell Sage Foundation: 75-109
- Haapasalo, J., & T. Aaltonen, 1999. "Child abuse potential: How persistent?," *Journal of Interpersonal Violence* 14(6): 571-585
- 長谷川真人, 2005 『児童養護施設と子どもの生活問題』 三学出版
- 長谷川真人, 2007 『児童養護施設における自立支援の検証』 三学出版
- 廣瀬さゆり, 2007 『児童養護の当事者による、自立の力を育む援助に関しての一考察—児童養護施設特有の課題と自立を育む要素の検証』 東洋大学社会学部卒業論文
- 池田由子, 1987 『児童虐待』 中公新書
- 伊藤嘉余子, 2007 『児童養護施設におけるレジデンシャルワーカー—施設職員の職場環境とストレス』 明石書店
- 上山信一, 2002, 『日本の行政評価—総括と展望』 第一法規出版
- 春日明子・早川悟司, 2006 「児童養護施設における高年齢児童の自立支援」 『子どもの権利研究』 9: 24-27
- 北島宏一, 1999 「仙台キリスト教育児院における自立支援プログラムの実際」 『児童養護』 30(1): 6-10
- 神戸賢次, 2007 「児童養護施設における自立支援—岐阜県下 12 施設での調査を通して」 『東邦学誌』 36(1): 35-51
- 萬谷千栄子・西崎博子, 2000 「児童養護施設における自立の評価に関する調査研究—児童と職員への調査から」 『児童臨床研究所年報』 13: 35-45
- Ogbu, J.U., & H.D. Simons, 1998, "Voluntary and Involuntary Minorities" *Anthropology & Education Quarterly*, 29(2): 155-188

- Rossi, P.H., M.W. Lipsey, & H.E. Freeman, 2004. *Evaluation: A systematic approach*. California: Thousand Oaks
- 斎藤嘉孝, 2008 「「ペアレンティング」講座の行政的実践とプログラム評価—家庭教育事業の全国調査結果をふまえて」『西武文理大学紀要』 11: 57-72.
- 庄司順一・谷口和加子・高橋重宏・山本真美・農野寛治・大竹智・鈴木力・中谷茂一, 1997 「児童養護施設におけるアフターケアに関する研究」『日本子ども家庭総合研究所紀要』 34: 7-22
- 竹中哲夫, 1998 「児童養護施設等における自立と「児童自立支援計画」をめぐって」『児童養護』 29(2): 46-49
- Wilson, W.J., 1987. *The Truly Disadvantaged*. Chicago: University of Chicago Press

当稿は『西武文理大学研究紀要』第12号（2008年、p.33-43）に掲載された。